

今日のキーワード

パノプティコン

panopticon

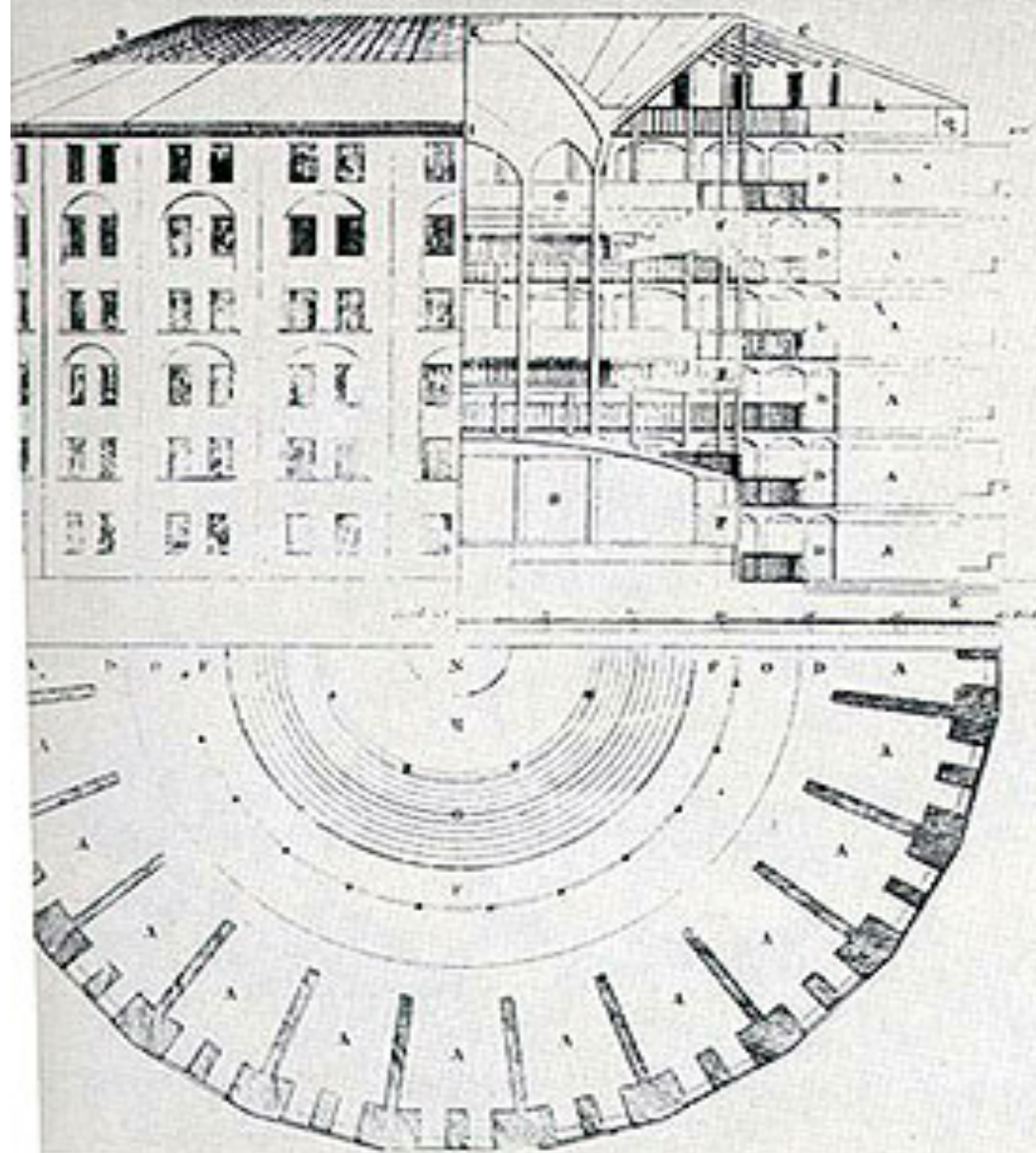
出典

- フランスの哲学者ミシェル・フーコー(1926-1984)の著作『監獄の誕生-監視することと処罰すること』(1975)で提唱した考え
- パノプティコン(pan+opticon)(一望監視装置・施設)
 1. 一八世紀末にイギリスの哲学者ジェレミー・ベンサム(1748-1832)が考案した、「ヒューマンな」監獄のモデル。
 2. 「啓蒙主義」の時代の構想であることに注意

問い

- 現代社会との関係
- 監視社会＝パノプティコン社会の強化、という考えはじつに平凡（文化左翼）
- むしろフォーコーを手がかりにあらたな視覚世界を作り出すことを考えたい・・・

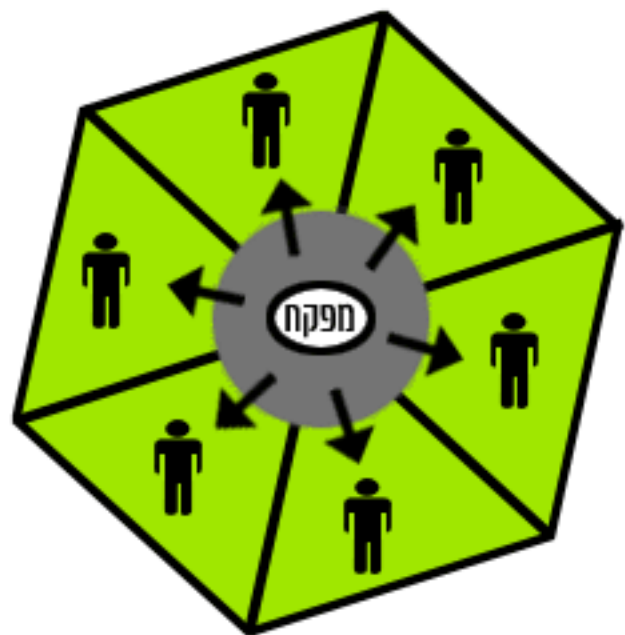
*A General Idea of a PENITENTIARY PANOPTICON in an Improved, but as yet (Jan 7th 1791) Unfinished State.
See Postscript References to Plan, Elevation & Sections (being Plans exposed to us N^o 2).*



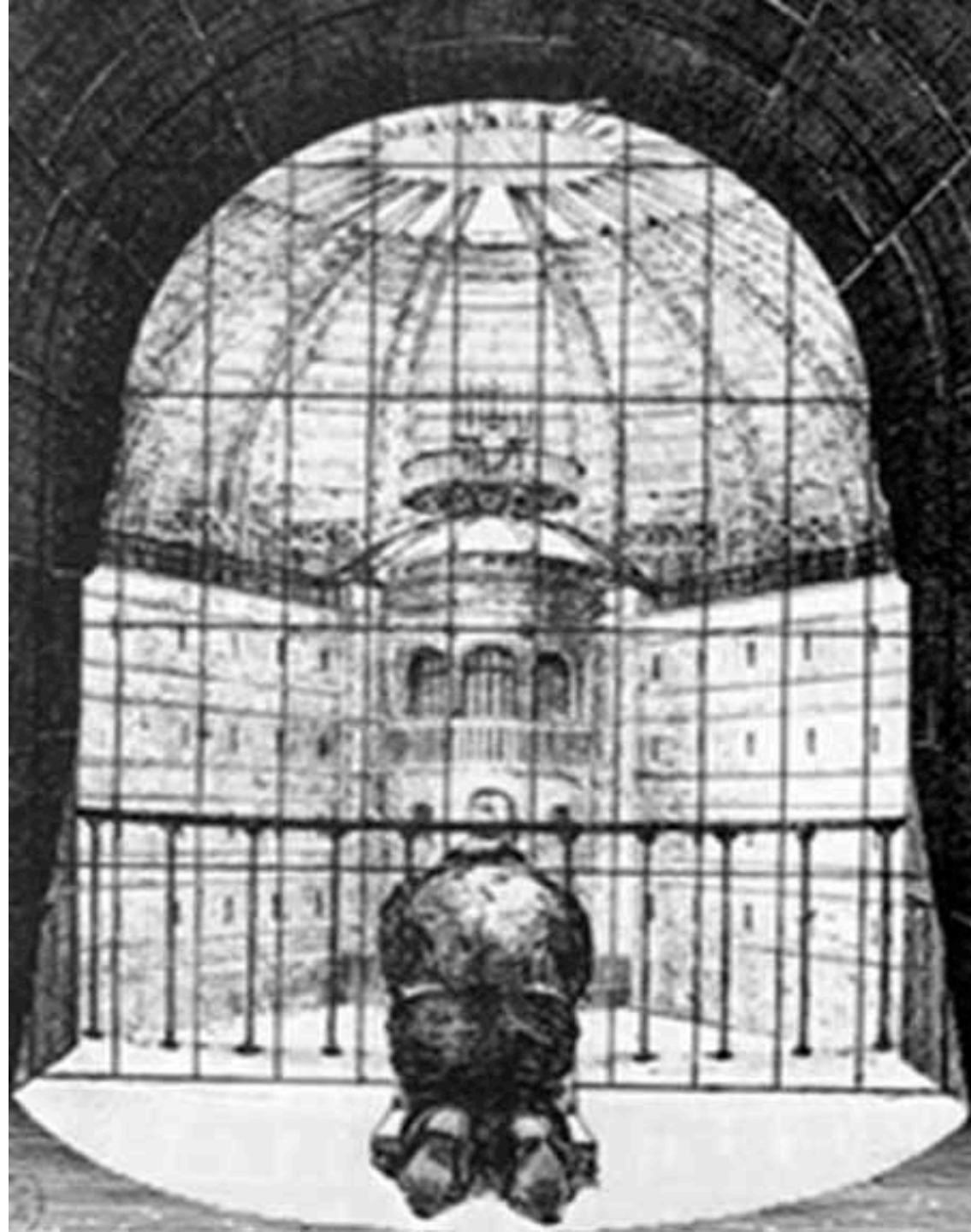
EXPLANATION.

- A. Cells
- B. Hall
- C. Entrance
- D. Chapel
- E. Prisoner's Hall
- F. Chapel
- G. Prisoner's Hall
- H. Prisoner's Hall
- I. Chapel
- J. Chapel
- K. Chapel
- L. Chapel
- M. Chapel
- N. Chapel
- O. Chapel
- P. Chapel
- Q. Chapel
- R. Chapel
- S. Chapel
- T. Chapel
- U. Chapel
- V. Chapel
- W. Chapel









パノプティコン以降の変化

かつての刑罰

1. 残虐な刑罰
2. 見せしめとしての刑罰
3. 不連続で不平等
4. 見世物としての刑罰
5. 個人を処罰して集団を脅す)
6. 身体の処罰

パノプティコン

1. 刑罰の軽減
2. 矯正のための施設
3. 連続的で平等
4. 個人一人ひとりを見る
5. 個人一人ひとりを効率的に管理
6. ひとりひとりの「こころ」を矯正すること

「可視性がひとつの罫だ」

囚人ひとりひとりの行動を観察

1. 囚人は「見られるが見ることはできない」
2. 看守は「見ることはできるが見られることはない」

パノプティコンの利点

- 閉じ込められる囚人一人ひとりが舞台上で演じて観察される。
- その観察の結果を計量化し、「どれだけ矯正されたか」をデータ化することができる
- 矯正するために「暴力」はいらない。人員も削減できる。
- 再教育の実験場や作業場とすることができる

キーワード2「ディシプリン」

- 「規律」「訓練」を意味する言葉
- 個別化された個人の集団の管理方法
- 「人材活用」
- (兵隊)学校、(精神)病院などに応用

FIGURE LXVI.

Reposez-vous sur vos armes.

CE commandement s'exécute en quatre temps : le premier, en étendant le bras droit vis-à-vis la cravatte, le mousquet planté droit sur la crosse : le second temps, en laissant glisser le mousquet au dessous de la ceinture de la culotte, & en haussant la main gauche au bout du canon du mousquet : le troisième, en laissant tomber la crosse du mousquet : & le quatrième, en glissant la main droite pour la joindre à la main gauche.



FIGURE LXVI.



*Reposez vous sur vos
armes.* R ij

「休め！」

FIGURE LXX.

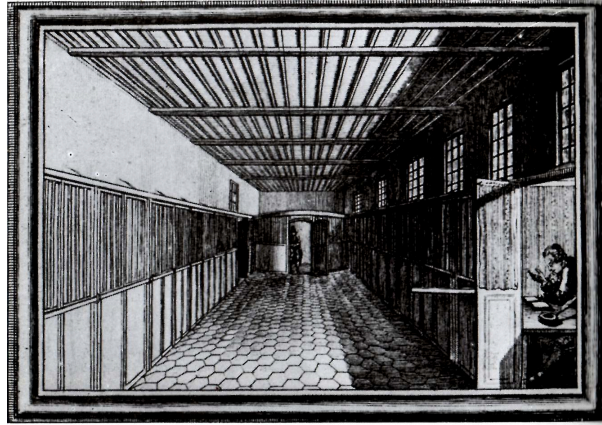
Reprenez vos mesches.

CE commandement s'exécute en quatre temps : le premier est, d'avancer la pointe du pied droit à quatre doigts de la mesche, ayant le bras droit étendu à la hauteur de la cravatte : le deuxième est, de baisser le corps en tenant le jarret roide, & le genouil droit un peu plié pour prendre la mesche dans les doigts de la main droite : le troisième temps est, de se relever droit en mettant le pied droit vis-à-vis du pied gauche, & en glissant la crosse du mousquet en dedans pour remettre la mesche dans les doigts de la main gauche : le quatrième temps est, de repousser son mousquet sur l'épaule, & d'étendre le bras droit le long de la cuisse.

FIGURE LXX.

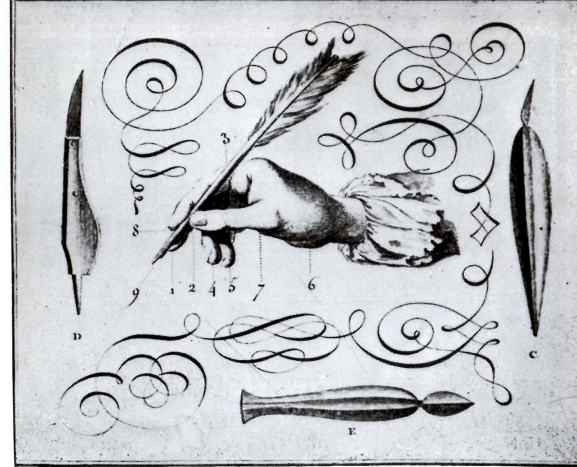
*Reprenez vos méches*

火繩を取れ！



9

- 8/ 書き方の手本 (I・N・R・D・P [国立教育研究・資料施設] の歴史的収蔵品より)。本文156ページ参照。
- 9/ ナヴァール校 [内部]。フランソワ=ニコラ・マルティネ作の版画 (1760年頃)。(I・N・R・D・P の歴史的収蔵品より)。本文148~149ページ参照。



8

ナヴァール学校

書き方の手本

まとめ

1. ・ 個人を配分するための視覚的な装置として作られた建築
2. ・ 構成メンバーはこの装置の構成要素。とりわけ囚人は観察対象であると同時に役者
3. 囚人＝生徒＝兵隊＝病人はなんらかの「変化」や「差異」を身をもって示さなければならない。

フーコーの分析の特徴

- 権力とは？

1. 権力＝抑圧ではない。禁止や制裁のようなネガティブなものではなく、むしろ個人の「こころ」を見えるようにするポジティブなもの。
2. 個々人の振る舞いを「禁止」するのではなく、むしろさまざまな振る舞いを訓練したり、それを評価したりする。Conductをconductする

フーコーの分析の特徴2

3. 権力＝法律ではない。むしろそれを取りまくさまざまな「制度」(監獄、病院、兵舎、学校)などで鍛えられる「技術」において働いている
4. 権力は「誰か」あるいは「国家」などの機関が「持っている」ものではない。むしろ人と人の中に働く力のようなもの。(権力諸関係)

フーコーの特徴3

5. この関係はときどき逆転するが、「抵抗」もそのなかに織り込み済み(囚人は役者なので…)
6. 科学も権力とは対立せず、むしろ密接に絡み合っている。(犯罪者の骨相の分析、精神医学など)。「告白」という装置。

さてどうしよう

- フーコーの権力論は「反権力」という考え方を無効化してしまう？
 - 権力は「悪」ではない
 - 権力は禁止したり抑圧したりするものではない

権力はいいもの？

1. フーコーの権力論はむしろ人と人との間にあって、コミュニケーションを可能にしてくれる。
2. 権力は効率的な身体の動きを訓練させてくれる
3. 権力は人材活用に有益である
4. 権力は統率力を高めてくれる。
5. だれもがそれなりに評価される
6. 規律は「独裁」よりいい

しかしながら

- いまある規律の仕組みに「乗れない」人は、人間として評価されない（「汚辱のクラス」）
- 矯正不能な人間は、排除される。
- 「だれもがそれなりに評価される」→でもそういう社会はいつも幸福だろうか・・・
- ほかのかたちの社会の仕組みはないだろうか・・・
もしいまある社会が息詰まるような気持ちを与え
るとしたら

5月25日 キーワード

安全装置・生の権力

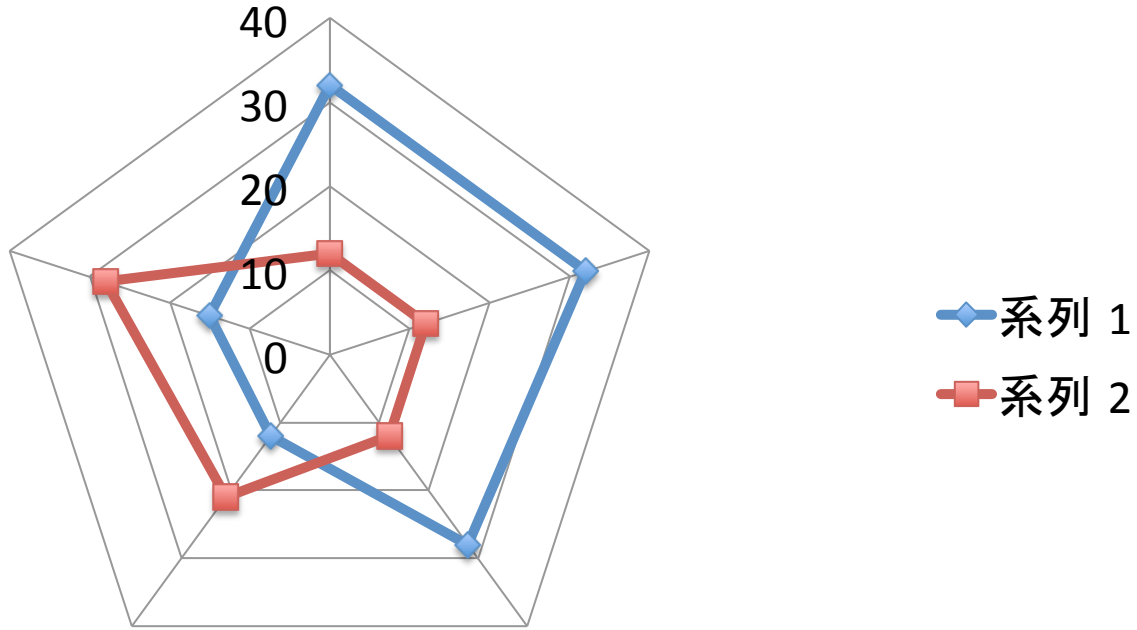
パノプティコン補足

- 逸脱をなくすことを目的とする
 - 細かい規則の増殖（怠慢、遅刻、注意力不足）
（不注意は罪？？？）
- それに対して、軽度の「非行」が増殖。
- 「ミクロな権力」

目的

- 懲罰による、人材の配分。
- 逸脱を明示化

配分される 生



汚辱のクラス

- 規律システムそのものに乗れない人→アブノーマル
- システムの外に廃棄される。
- 「汚辱のクラスはなくなるべきもの。でも仕方ない……」
- 規律の「動機づけ」として機能。

normalisation

- このような規律システムの機能のことをフーコーはnormalisationと呼ぶ
- Norm : 正常、平均、規範

問い

- 規律社会でどのように生きていくか??
- システムの網目でサーフィンする??
- 逸脱を無限に繰り返していく..
- 「横断線」「逃走線を引く」と言う人もいるが??

さらに深く考えたい人のために

- 従来の権力論（国家というイデオロギー装置、資本主義における疎外など）の批判。
 - フーコーに対する、マルクス主義からの批判。
「フーコーは抵抗の可能性を奪ってしまった」
- → フーコー：むしろ「権力」＝「悪」とみなすことこそ、息詰まっている。

キーワード

安全装置

セキュリティ〔安全〕装置

- ある正常値を定め、さらに越えてはならない限界値（それ以上は想定外）を定めることで、さまざまな次元に介入して、コストを計算するようなプログラム
- それ以外は「放任」(laisser-faire)（自由市場の動きに任せる）

人口 (population)の統治

- Population
- 人口
- 住民・国民
- 生物の個体群
- 調査対象となる母集団 (統計学)

セキュリティ装置の特徴

- 人口数の管理が重要
- 都市計画
- 物資が円滑に流通すること
- 衛生的な空気がうまく流れること
- それらを統計的に処理して「情報」として流通させる

セキュリティ装置の目的

- 住民集団という個人の群れを、効率よく管理することができる
- 危機管理:
- 事故、事件への迅速な対応
- 情報の開示
- 人々の動きの管理
- 人々の衛生管理
- 人々の生と死の管理...

セキュリティ装置の目的

- このようにして
- 社会の健康
- 社会の安寧・秩序の維持
- → 「治安」(police, polizei)維持

生の権力の誕生

- こうして人々は、生まれてから死ぬまで、ある種の装置に組み込まれている
- 出生率、死亡率、住民数、健康管理、食事や衛生の管理
- → 「豊かな国家」のイメージ

キーワード

生の権力 (BIO-POUVOIR, BIO-POWER)

フーコーの分析

- 「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現れた、と言ってもよい」(『性の歴史』第一巻、175)
- 身体への関心
- 生命に対するテクノロジー
- 生物学的に危険な者の排除(ナチズム)

建築論

- 建築を視覚的に分析し、「装置」として分析
- → 新たな「建築」のデザイン設計が、生のありかたを変えることに結びつくのではないか??

スティーヴン・ホール「キアスミ現代美術館」(ヘルシンキ)

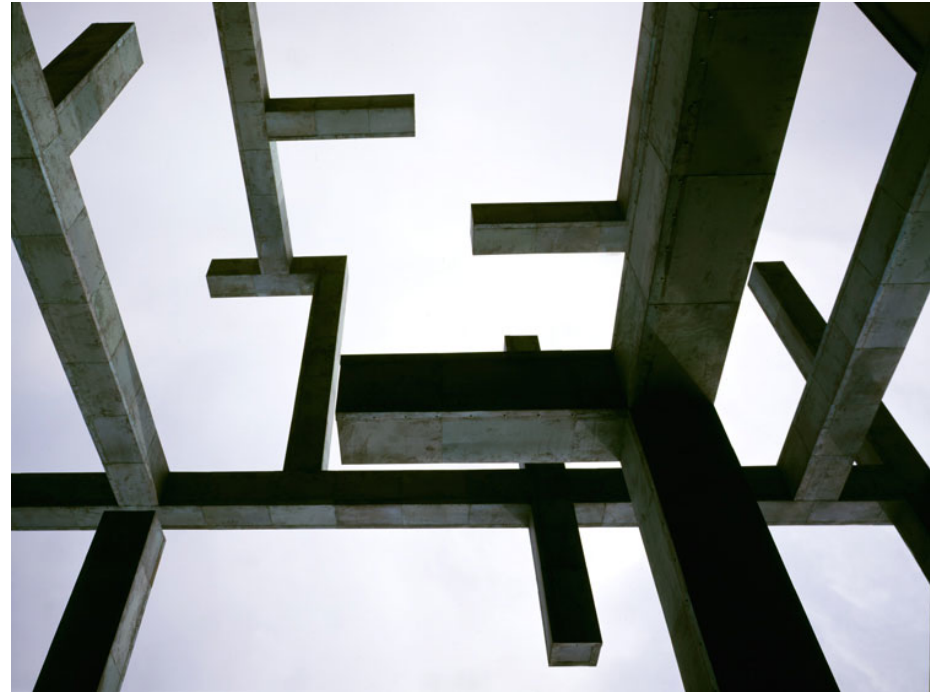
copyright:<http://www.stevenholl.com/index.php>



視線の交わる空間



ポロシティ: MAKUHARI BAY NEW TOWN Chiba, Japan, 1992-03/01/1996



ポロシティ



ホールの建築のその他の特徴1

- からだの内部と外部の反転(「内側から感じられると同時に外から近づきうる」(メルロ＝ポンティ))
- 右目と左目のずれが作り出す世界
- 他者の身体との絡み合い

ホールの建築のその他の特徴2

- 拡散しながら変化するひかり: 色や光のグラデュエーションを、動く身体の全体にしみわたる
- 襞が繰り広げられるようなパースペクティヴ
- 物質的な肌触り (cf. haptic : 視覚における触覚)

Haptic (cf.『HAPYIC 五感の覚醒』 (原研哉))



Steven Hollの建築のキーワード

- 「運動しながら知覚する身体」から立ち上がってくる建築
 - 伝統的には「運動」と「知覚(認知)」はなかなか同居しないものと考えられてきた。
 - しかし最近の心理学においては「運動における知覚(perception in action)」(アルヴァ・ノエ)に関心が持たれている。

『知覚のなかの行為』

- 左右の刺激を逆転させた眼鏡の実験が作り出す「ゼリー」のような世界・・・(プリント)
- ノエの主張
 - 「物を見ること」＝「運動しながら感覚する身体」と「環境」との相互関係

Cf. ギブソンの「アフォーダンス」理論

- 「視覚は目に依存しており、それは脳に接続されていると言われている。私が示唆したいのは、自然な視覚は、大地に支えられた身体の、その上に立っている頭の、そのなかにある目に依存しているのであり、脳は視覚システム全体の中心的な期間であるにすぎないということである」

- 現代人が自明のものともみなしている価値
- (個人主義、人間性、こころ、抵抗、科学の中立性…)
- これらは規律装置によって作り出されてきたこと。それは「最近の発明品」
- (せいぜい一九世紀以来)。cf. 「人間の死」(『言葉と物』)。